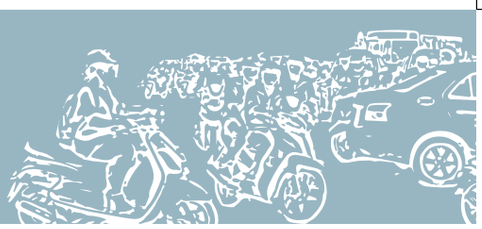
砂名の ベトナムに乾杯



第24回　教育について考える

半年ほど前のこと。日本の教育システムやノウハウを、ベトナムの教育関係者にコンサルティングしている方と、お話させていただく機会があった。ベトナムでは、子供たちの効果的な学力向上に期待する教育熱心な親が多いそうである。40年前の日本がそうであったように、詰め込み教育の傾向にあるらしい。その方の子女が、同じく教育関係の道に歩まれ、来春は大学院に進み、北欧を視察に行かれるらしい。フィンランドは「宿題もテストもないのに学力が世界一」と聞く。しかしこの情報は正確ではなく、一部の学校の話がフィンランド全体のこととしてネット上で流布されているらしい。いずれにせよ、日本のゆとり教育はどうだったのだろうか。

さて13年ほど前。能楽の大鼓奏者、大倉正之助氏が東京都と「こども能チャレンジ」を主催された。私は大倉事務所のカメラマンとして記録撮影させていただいたのだが、親御さんからお話をお聴きすることができた。能楽に興味を持った子供たちの覚えは早く、六か月後に舞台で公演できるまでになるのだが。親が驚いたのはそこではない。作法を学び、能楽を稽古することで、集中力を身に着けた子供たちの、学力が上がったというのだ。「逆に私たちが、(日々の作法が)成ってないと叱られるありさまで」と、嬉しそうに語る親御さんの表情が忘れられない。

韓国人の知人が一昨年、7区で文化教室をオープンした。韓国から先生を招聘してアートを教えたり、在住のイギリス人が数学や英語を教えていた。私も韓国人の先生に筆絵を習った。セミナー終了後、知人自家製のマッコリやキムチを頂いた。器やもてなしの心は日本酒にも通ずる。特に私の出身地、奈良の文化が大陸から伝来した名残が多いこと、東京で仲間たちが日韓でアート展を頻繁に開催していたことなどから、お隣の国々の文化には親しみがあった。ただ「文化教室」の日本版はホーチミンではまだ見かけない。

7区の文化センターで筆絵を習う。奈良県の特産品である「くれ竹」の筆ペンを使っていて、韓国と奈良の文化的なご縁を感じた。

日本では一時、「マナブとケイコ」のように(1990-2016)、習い事・資格習得のための講座やレッスンが流行した。私も産経学園で、短期の写真講座を持たせていただいたことがあったが、全体的に生徒は減少傾向にあった。今やオンラインでどこでも受講できる。「リアル教室」はある意味、役目を終えたのかも知れない。

さて、7区で文化教室を主宰している彼から興味深い話を聞いた。彼のミャンマーの友達から「当時の韓国はどうでしたか？」と尋ねられたそうだ。ご存じのとおり今、ミャンマーは軍部の制圧下にある。一方韓国では、1979年に朴正熙大統領が暗殺され軍事独裁政権が終わると、それまで抑圧されてきた民主化への気運が蠢動しはじめ、翌年の春、新学期を迎えた大学街で一気に沸騰する。「ソウルの春」である。ミャンマー人の彼は、自分がデモに参加すべきかどうか判断が付きかねていたのだった。当時の韓国では多くの学生たちがデモに加わった一方で、運動に参加せず、何が起こっているかを見極め、勉強に打ち込んだ学生たちがいたという。「その人たちが、経済界、政界、法曹界で活躍して、今の韓国を作ったんですよ」。

最近ベトナムではロボコン優勝などでの活躍が聞こえてくるが、教育によるどのような未来が待ち受けているのだろうか。

月森砂名（つきもりさな）

奈良県出身。同志社大学卒業。2015年、ベトナム初の角打ち【日本酒で乾杯！】に続き、2020年、Pham Viet Chanhにて日本酒専門の「角打ちのある酒屋」【蔵 KURA】をオープン。経営に携わる。東京で舞台撮影や制作の仕事をする傍ら、作家活動を行う。2009年よりNPO法人Layer Boxにて、日本の伝統文化について、大学、高校、専門学校とともに、PV、3D、CGなどのコンテンツ制作および世界発信を行う。

p34_砂名の□トナムに乾杯_24.indd　34　2021/11/13　10:48